

# 教員紹介

## 日本美術史 —— 関心を培い、文化を比較し、知の地平を広げる

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回は比較日本学教育研究センター専門教員のロール・シュワルツ＝アレナレス先生にお話を伺います。



**Laure Schwartz-Arenales**  
ロール・シュワルツ＝アレナレス

### お茶の水女子大学と 外国人研究者の間の架け橋に

#### Q. ご出身は？ご専門は？

**A.** 生まれも育ちもフランスです。専門は美術史とミュゼオロジーですが、中でも日本美術史、特に仏画、そして主に欧米の美術館所蔵のコレクション分析を通して見る、西洋における日本美術の歴史という二つのテーマに携わってきました。

#### Q. フランスの方が日本美術史を研究されるようになったきっかけは？

**A.** 私の大叔父はフランス国営電気会社に勤めていたのですが、中国や韓国、日本に出張した際、多くの美術品を集めていました。大叔父は私が生まれた

年に亡くなったのですが、残された収集品を見て育った私は、子どもの頃からそうした東洋の絵画にとっても惹かれていました。花鳥画・水墨画などいろいろありましたが、その色づかいに感動し、見たことのない日本の風景を想像しながら育ちました。パリのエコール・ド・ルーヴル（ルーヴル美術館附属の大学・大学院）に入学し、極東美術史を専攻したのも、こうした体験があったからだと思います。大学院修了後は、フランス国立ギメ東洋美術館で学芸員補佐として働きました。仏像や浮世絵等のコレクションの整理、展覧会の準備、日本から来た研究者の調査の手伝い、資料の電子化の作業など、ほんとうにいろいろな仕事をしました。ギメ美術館日本部門で過ごした4年間、

日々美術品に直に触れながら、極東美術とイコノグラフィーの知識を深めるだけでなく、エコール・ド・ルーヴル時代に始めた、ジャポニズムを背景としたギメ美術館の主要コレクションの誕生についての研究も進めることができました。こうした実務と、また日欧の多くの研究者や美術品修復士との交流が、私にとって大きな財産になっていると思います。その後ソルボンヌ・パリ第4大学の大学院に入学し、フランスにおける日本美術普及の第一人者、秋山光和先生の後押しで、博士課程在籍中に東北大学の大学院に留学しました。フランスには仏画の専門家がいなかったため、東北大の仏画研究者、有賀祥隆先生との出会いは、ほんとうに貴重でした。そこで日本の最も古い涅槃図である「応徳涅槃図」（1086年制作）を研究テーマとして選び、仏画における山水の意味について研究し、パリに戻ってから博士の学位を取得しました。その後は東北大学や京都国立博物館の研究員を勤め、2004年からお茶の水女子大学で勤務しています。

#### Q. 幼い頃から想像をふくらませていらした日本の風景は？

**A.** 初めて来日したのは25歳のときです。ギメ美術館で働いていたときのことですが、倉庫に収蔵され忘れ去られていたある仏像が、脚光を浴びることになりました。それがどのようにしてフランスに来たのかは不明なのですが、偉大な日本学者であるベルナル・フランクによって、これが長いこと行方不明であった法隆寺金堂の勢至菩薩像である可能性が高い、との調査結果が出たのです。この勢至菩薩像（1231年制作）を、国宝法隆寺展

のためにいったん日本に送り、再びフランスに連れ戻す仕事のために、私は初めて日本の土を踏みました。ちょうど11月で奈良は紅葉の盛り。その美しさや古寺のたたずまいの雰囲気、仏像の周りで働く方々の熱心さ、などに感動しました。また必ず日本に来よう、「ぜひまた日本に来させてください」と勢至菩薩にお祈りしました。私は今こうして、自分の夢を果たしているのですから、勢至菩薩が私を日本に導いてくれたのだと思っています。

### Q. 仏画、それも仏画中の山水をテーマに選ばれたのは、なぜ？

A. 仏画の研究も山水画の研究も、既にたくさん行われていましたが、仏画における山水の研究はほとんどなく、それでその関係性を知りたいと思いました。キリスト教絵画のイコンなどと比較したい気持ちも最初はありましたが、そういうシンボリックなものとはまた異なることが、研究対象を一つに絞ることによって、だんだんわかってきました。私が仏画に惹かれるのは、まずその色調です。絹地の裏からも表からも描きこんでいく技法のすばらしさ、金や銀を用いながら、絹地に染み渡ったような穏やかな色調のみごたさは、西洋はもちろん、日本にもまだ十分に知られていません。私の研究は2008年に鹿島美術財団賞を受賞し、日本からの評価もいただきましたが、こうした日本の古い技巧のすばらしさが、もっともっと知られてほしいと願っています。私は仏像よりも仏画が好きなのですが、それがなぜかは説明できません。仏画は図像的興味、知的興味の対象ではありますが、何よりもその奥にある精神性と美学が、私を惹きつけるのだと思います。フランスには仏教思想そのものの研究の伝統はありましたので、フランスではそうした勉強はしていました。日本に来て古い資料を読んだり、経典を読んだりし、それが次第にフランス

での勉強にリンクしていきました。やはり日本に来なければ、この研究はできなかったと思います。

### Q. お子様が生まれたばかりですよね

A. 上の娘は4歳になります。下の息子は去年の4月に生まれました。二人とも日本生まれです。フランス語の幼稚園、日本語の保育園の両方にお世話になっていきますので、日本語もフランス語も話します。今のところ子どもたちにとって、日本は生活の場、フランスはバカンスに行くところ。どちらの国も大好きです。夫は専門は全く別分野ですが、私と同じで日本の美術が大好きですよ。

### Q. お茶の水女子大学と学生について、ご感想を

A. お茶の水女子大学では、比較日本学教育研究センターの仕事として、様々なイベントの企画に携わっています。国際日本学シンポジウム・講演会・研究者同士の交流のコーディネイトなどです。中でも、研究仲間の支えもあって、お茶の水女子大学と欧米の著名な研究施設の間で、人文科学だけでなく理系の分野においても、画期的な学術交流や大学間協定を確立できたことは、とても嬉しいことです。日本学という分野でのこうした交流を、内容だけでなく方法的にもさらに発展させながら、今後はさらに広く、他のあらゆる分野に携わる教員、学生にとっての国際交流の架け橋となるよう、努めていきたいと思っています。私は哲学、数学、生物学など様々な分野の研究者に囲まれて育ちました。そのような私が、日本でこうした仕事ができることはとても有意義なことだと感じますし、とても幸せに思っています。お茶大は理想的な環境で、大好きです。学生に対しては、欧米における日本学の誕生とその発展についての授業をしています。ワー



クショップのような形でしていますが、学生はとても真面目で好奇心旺盛、他者との交流の難しさに十分配慮しながら、おもしろい質問をしてくれます。授業を通して学生・教師ともにちょっと変化するような、そんな授業です。

### Q. お茶大生へのメッセージをお願いします

A. 自分がちゃんと勉強したことを外国人に伝える、ということをしてほしいと思います。日本には外国人に知られていないことがたくさんあります。私も定期的にフランスに戻りますが、近年日本食レストランがたいへん増えており、日本学者や日本愛好家だけでなく、一般の人々も関心をもつようになってきているのに驚かされます。欧米にとって日本の存在は、とても大きくなっています。こうした今であるからこそ、ぜひ日本を伝えてほしい。みなさんはお茶の水女子大学で学んだからこそ、ステレオタイプでない日本を伝えることができると思います。自身の専門を説明すること、そしてその際、比較という方法論も視野に入れること、そんなことを考えてほしいと思っています。日本と西洋の研究者では、研究テーマが同じであっても、その方法論やアプローチの仕方は違うものです。自分の研究テーマの垣根を越え、学際的、あるいは国際的な視野で研究領域を広げていってください。

## 教員紹介

日本美術史 —— 関心を培い、文化を比較し、知の地平を広げる